

## 月下の自然

Thoreau, Henry David

小野, 和人  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5402>

---

出版情報：言語文化論究. 14, pp.205-219, 2001-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 翻訳：月下の自然 (“The Moon”)

ヘンリー・D・ソロー (1817-‘62) 作・小野 和人 訳

### 作品の編者によるまえがき

ソローの日記の稿本全39冊が、出版のためホートン・ミフリン社に送りこまれた際に、これにさらに若干の枚数の別原稿が加わっていた。日記から転記されたもので、明らかに彼が講演かエッセーに仕上げてゆく途中の中間原稿らしかった。さらにこの中に一束のメモ程度の草稿があり、これにソローは「月」(“The Moon”)という題名をつけていた。たぶん彼は、これを講演の材料にしようとしたのだろう。いつもの彼の著作の手順によれば、これを講演後、いずれは定期刊行物にエッセーとして載せ、さらには一冊の著書の中に組み込むつもりだったのだろう。彼がもくろんだこの「講演」の一部分に関してだが、実はこうした手順がやはり結果的に成立したのである。もっとも彼の没後ではあったが。というのも、「夜と月光」と題するエッセーが『アトランティック・マンスリー』誌上に1863年11月に掲載され、後に彼の死後出版の著作『エクスカーション』(『徒歩紀行』)中に組み込まれたからである。この原稿を『アトランティック』誌に送ったのは、たぶん彼の妹のソフィアであろう。『エクスカーション』という著作を一冊本に編纂したのは彼女であるが、それを実際に編集したのはソローの友人ウィリアム・エラリー・チャニング(2世)であつたらしい。「夜と月光」はこの著作中でわずか12頁ほどを占めるにすぎず、以下の本作品の分量と比べるとはるかに短い。

私見によれば、ソローの日記からのこの抜粋は、やはり彼が残したままに(句読点以外の変更をほとんど加えずに)、内容の性質にある程度マッチした体裁で読者に供するのがふさわしいと思われた。本作品はソローの完成したエッセーと目されるべきではない。けれども、彼の著作には風格があり、日記中のほんのささいな記述ですらも、独特の威厳と美を伴わないことはまれである。1851年6月14日の日記の以下のような記述は、特に晴れやかな美しさを持っているが、英米文学の全作品を探してみても、はたしてこれにまさる名文がどれほどの数見つかることだろうか。

‘When man is asleep and day fairly forgotten, then is the beauty of moonlight seen over lonely pastures where cattle are silently feeding.’

(「人が眠っており、昼間がすっかり忘れられているときに、そのときにこそ、月影が美しくそそがれる。人けのない牧草地の上に。ひっそりと牛たちが草を食んでいるところに。)」

ソロー自身は、メモ的な草稿を一束にまとめる際に、この格別な文章を見過ごして、入れなかつたらしい。けれども読者各位は、本作品の中に大変優れた記述があり、処々に他の英米文学の最高の散文にひけをとらない文章があることに気づかれるであろう。

F. D. A

[フランシス・D・アレン]

## 作品

### 1. 夜汽車

私の友人たちの不思議がることだが、私は夜一人で、人けのない野原や森を散歩するのが好きだ。ところが、全く人けがなく、こよなくわびしい真夜中に歩いていても、列車の汽笛や車両のとどろきが聞こえてくることがある。その車両には、ときに私の親しい友人たちが乗っていて、夜の鉄道をひきまわされているのだが、それでも彼らに言わせると、そこは熟知した安全な公道なのだ。要するに鉄道であろうと、人跡未踏の荒野の中であろうと、人は自分自身のための道をこしらえはせず、また選びもしないで、ただ運命が定めてくれる道をありがたく拝受しているだけなのだ。

私の孤独な散歩コースは、フィッチバーグ鉄道<sup>1)</sup>が所有しているのと同じ営業認可を受けている。もし鉄道の持ち主たちがマサチューセッツ州からの特許状を持ち、天からのさらにもっと重要な認可を得て、そのコースを定め、今流行のやり方で動いているのならば、私の方も、たとえ天からのみであろうと、やはり認可を受けており、それによって私独自の散歩コースを旅し、それに必要な土地も入手しており、もしそれで損害がでるのならば、その賠償をする手はずにもなっている。天は鉄道のみならず、私の散歩道がうまく成り立ってゆくことにも同じほど強い関心を示しており、両者の株を同程度にも所有してくれている。それにおそらく、私という一人の乗客は、結果的に一年間に鉄道でゆくのには負けないほどの距離を、私自身の散歩道で運ばれてゆくことになるだろう。

### 2. 七月の夜景

多くの人らは昼間歩く。夜歩く人は少ない。昼と夜では季節がまるで異なる。たとえば七月の夜の場合。太陽の代わりに月と星が出ている。モリムシクイ [ツグミの一種] の代わりにヨタカがいる。採草地にはチョウの代わりにホタルが飛ぶ。羽のついた火の粉。こんな存在を信じ得る人がいたであろうか。火の粉を伴って露を置くこの暗がりの中に、どんなたぐいの涼しい慎重な生命が宿っているのだろう。このように人間も、その眼か、血液なか、脳髓に火を持っている。歌う鳥たちの代わりに、カエルのコロコロ鳴く声とコオロギの熾烈な夢がある。ジャガイモは直立し、トウモロコシは速やかに育つ。それに月夜の晩は、木立が朦朧と現れ、穀物畑がはてしなく続き、岩と木々と灌木と丘の影は、そのものら自体よりもくっきりと見える。地面のごくわずかな凹凸もその影によって明確にされる。だから足がかなりなめらかだと感じた場所が、結果的に、目にはごつごつした凹凸に

映るのだ。岩の中のごく小さいくぼみがほの暗く、深い穴となる。森の中のシダは熱帯産のものほどに大きく見える。木々越しに見える水たまりは空と同じくらい光に満ちている。古代インドのプラーナ〔ヒンズー神話の聖詩書〕が大洋について述べているように、「昼間の光はその水たまりの水面に避難している」のだ。

森林は重々しく、暗い。自然は眠っている。夜には自然の眼が半ば閉じられているか、それとも頭の中にひっこんでいるのだ。視覚でない感覚が主導権を握る。散歩者は嗅覚によっても導かれる。今やあらゆる植物と野原と森が香りを発する。採草地では沼地ナデシコが、道ばたではヨモギギクが。聴覚も嗅覚も、ともに夜の方がよく効く。以前は気づきもしなかった細流の鈴のような音が聞こえる。岩々は昼間吸収した太陽の熱を一晚中とどめている。真夜中に牧草地の岩の上で（あるいは樹木のない丘の頂きで）あおむけになり、星をちりばめた天蓋の高さについて思いをめぐらしてみたまえ。星々は夜の宝石であり、おそらく昼間が見せてくれるどんな持ち物よりもみごとなものだ。

かくも晴れやかで壮麗なこの風土では、夜が人の精神を大いに癒し、育てくれるので、感受性に富む人の心が、こうした夜のことを忘却にひき渡してしまうはずはない。また、夜を戸外ですごしたためにより良く、より聡明にならない人もたぶんないと思われる。たとえその人がその償いに次ぎの日一日中眠らざるをえないとしても。その夜は、ギリシャ語源の言葉で「神の食物のようにかぐわしい（アムブロージアル）」という形容を立証してくれる夜であり、あたかもイスラエルでいう安息の地「ベウラー<sup>2)</sup>」におけるがごとく、大気は露を帯びた芳香と楽の音に満ちているので、我々は憩い、めざめたままで夢をみることになる。

### 3. 月の女神

ヒンズー教徒は、月を肉体としての存在の最後の段階に達した聖人に見たてている。月は太陽の補佐役ではなく、太陽の輝きをもう一度放つが、その炎はなく、よりおだやかな陽光をそそいでくれるのだ。今や通過する雲を通して月はひざまづくかに見えるが、次ぎの瞬間、藍一色の天の騎馬道を荘厳に昇ってゆく。大気全体が、銀色に輝く限りない光の潮を受けて白くなる。世界を包んでゆらぎながら。

月の女神で狩猟の守護神ダイアナは、やはりこのニューイングランドの空でも狩りをしているのだ。

天空のいろんな天体の中で、月こそが女王だ。月は女王にふさわしく、万物を清らかにする。月は折々の変化をしつつ、しかも永遠性を保っている。月こそ美しき人。彼女のそばでは美女たちも肩身がせまい。

時の流れも月を衰えさせはしない。月は時の戦車を進ませる。生命に限りある人間たちは、月の円軌道のもとに置かれる。月のそばでは、星々の持つ美德が滑落する。月によってこそまさに美德の完全なイメージが与えられる。

太古の時代をよみがえらせる大いなる者、大いなる魔術師。仲秋の時と狩猟月の満月<sup>3)</sup>

が輝くおだやかな夜に、我々の村の家々は、昼間どんな大工が来てそれを建てたにせよ、ヴィツルヴィウス〔紀元前1世紀頃のローマの名建築家〕のような者たち、あるいは彼を越えるような名工が建てたのだという顔をする。そして村は森と一体化した姿にみえる。

こうした夜には私を戸外にとどまらせてほしい。夜明けが来て、万物が統一を失い、混沌の状態にもどってしまうまで。

自然は博識でえこひいきのない教師であり、露骨な意見を述べたてたり、誰かにこびたりはしない。自然は急進派でも保守派でもないだろう。あのようにひかえ目で、それでいてあのように激しい月光のことを思ってもみたまえ。

#### 4. 夜の美徳

オシアン〔古代ケルトの伝説的英雄、詩人で武人〕は、太陽にむけての挨拶の辞でこう呼びかけている――

暗黒はいずこに住居を持っているのか、  
 星々の入る洞窟の家はどこにあるのか、  
 おんみはすばやくいずこへと星々の歩みを追いかけるのか、  
 大空で狩人さながらに星々の行跡をたどりつつ。  
 おんみは高い丘に昇ってゆき、  
 星々は荒野の山並みに下ってゆくのだが。

その際に、自らの想いの中で、星々が「洞窟の家」に向かうのに伴い、星々とともに「荒野の山並み」へ下ってゆかない者がいるだろうか。

たしかにサー・ウォルター・ローリー〔1552-1618、英国エリザベス1世の廷臣。文人、軍人、探検家〕の言うように、「星々は、おぼつかない光を放ち、人々が日没後それを眺めるためだけのものではなく、もっとはるかに重要な道具」なのだ。そしてオリゲネス〔古代アレクサンドリアの神学者〕が断言するごとく、「星々は主義主張ではなく、開かれた本なのだ。そこには来たるべきありとあらゆることが書き記されている。もし人々がそれを読めさえすればだが。」あるいは、プロティヌス〔古代ギリシャ・ローマの新プラトン派の哲学者〕の言では、「星々は意義深い、実用的ではない。」さらに聖アウグスティヌス〔354-430、初期キリスト教会の指導者、『告白』の著者〕によると、「神は秀でたる者を通して劣りたる者を治める」(デウス・レギット・インフェリオーラ・コルボラ・スベリオーラ)。ここからローリーが引用しているのだが、「賢人は星々の作用を援助する。ちょうど農夫が土の活性を支援するように」(サピエンス・アデュヴァビット・オープス・アストロールム・クエマドモーヅム・アグリコラ・テッラエ・ナツールム)。

かつて占星術士の中には、まことに未熟な発想を抱き、自分らが個人的に特定の星々と

関係があると思ひこむ者がいたのだが、それも不思議ではない。デュ・バルタス<sup>4)</sup>はシルヴェスター<sup>5)</sup>によって翻訳されているが、それにいわく。自分は、あの偉大な建築者〔神〕が、天の円蓋を、単に人見せのためにこのようなありとあらゆる火で飾り、野原で眺めているとるに足らない羊飼いたちを楽しませるためにあのようにきらびやかな楯で装ったとは信じられない、と。

また、我々の所有する庭園の縁や共有地の土手を飾っているあのちんまりとした花や、母なる大地がぬくぬくとした膝の中にいとおしんで包んでやっているちっぽけな小石が、いずれもそれなりの徳を持つのであれば、天のあの燦然とかがやく星々が何の美德ももたぬとは信じられない、と。

プラーナにいわく、「昼間は神々がもっとも強力であり、夜は悪鬼たちが支配する。」しかし、悪鬼とは、それより以前の王朝の、くじかれ、踏みにじられた代表者らに過ぎないし、それらがかもし出す雰囲気は人間の徳の発展のために不可欠なのだ。ちょうど暗い夜がトウモロコシの成長に欠かせないように。

昼間はいかに維持しがたいことだろう、もし露と暗やみを帯びた夜が、あのようなだれている世界を元気づけに来てくれないならば。いろんな影が我々のまわりに集まりはじめるときに、我々の原初の本能が目ざまされる。それで我々は自分らの巢穴からジャングルの野獣のようにしのび出る。知性が自然なえじきとするあのひそやかな黙想を求めて。

自然との絶えざるつきあいは、単に身体上のみならず道徳的、知的健康のためにも必要だ。学校や実業における規範は、自然の現象をじっと見つめるときのような晴れやかさを心に伝えてはくれない。科学者が科学的事実をあつかうように、冷静に、かつ大いなる距離を置いて人事をながめる人だけが哲学の高みに達しうる。言いかえれば、人の心をあつかう哲学者は、自然哲学者〔科学者〕の規範を必要とするわけだ。

古代インドの詩劇『シャクンタラ』によれば、バラモンの僧サラドワータは、最初都に入るときに、そのにぎわいに気押されたのだが、「今や自分はその都を、自由人が奴隷を見るごとく、きよらかな水で沐浴した者が、油とほこりにまみれた者を見るごとくながめる」と言う。

中央アジアのダットン地方の大草原地帯をはるばると旅してきた者たちの言うには、「再び耕作地帯に入ってくると、文明の喧噪と紛糾と騒乱が我々を圧迫し、息をつまらせた。空気は我々を見捨てるかのようで、我々は今にも窒息死しそうな気分になった。」

## 5. 月の光

ある晩、私が村から1マイル離れた鉄道の深い切り通しに入ってきたとき、西側の砂土の土手から、純粹そのものの月光がはじめてかすかに反射してくるのを見て感動した。その間、西の地平線はまだ夕陽の光を受けて赤く、その東側を染めていたのだが。

月光が、ほの青い草のように、神秘的な銀色の光でもって西の斜面を照らしているときに我々の気づくその最初の色合いと、東の斜面に残る太陽光の最後の波との間には、何という微妙な測りがたい合間の時があることだろう。いったい我々の五感がいかにしてその間を測るのか、我々はいかにして一方に気づき、さらにそこからもう一方に気づくようになるのだろう。それを我々がやってのけるとはすばらしいことだ。

月の光！その光が地上に降りそそぐのは世界のいつの時代に向けてなのだろう。月光は明けそめたばかりの露をおびた朝の光と同様なものであり、夜明けの光の微妙な色合いは、私にはむしろ夜のことを連想させるのだった。おそらく世界のごく初期の時代にとっては、こうしたあえかな光で十分だったのだろう。とはいえ、それは、昼間の光のように人間によって利用され、使い古されてはおらず、見慣れぬものであり、とても印象深いものだ。月光のもとでは、新と旧の王朝が共存し、対照されており、しかも時は、歴史に記録されているたがいに最も遠い時代同士の隔たりよりもっと広い幅を持ち、その間の橋渡しができないほどにその間隔が開いているのだった。月光に照らされて地層の見える砂土の土手の上に太古の時代が出現させられた。その時代に比べると、古代アッシリアの首都ニネヴェも若いのだ。月光が日光とそんなにかけ離れてはいないように、銀の時代〔ギリシャ神話の第二期〕は黄金時代〔第一期〕とさほど隔たっていない。とはいえ、おそらく、月光の中でいろんな国々が栄えたのだ。おそらくインカ帝国も、こうした光のもとで支配したのだろう。

私が西の方を見つめていると、そちらでは赤い雲がまだ去りゆく昼間のゆくえを指し示している。振り向くと、ひそやかにもの思いにふけているような、霊妙な月が、西の斜面にこれ以上柔らかくはありえないほどの光をそそいでいるのが見える。その斜面は、まるで千年もの間みがいたあげく、やっと輝きはじめたかのように、蒼白い光沢を出している。もうすでにコオログが、独特の節で、月へ向けて鳴いており、木の葉をそよがせて夜風が吹いている。でも、どこから吹いてくるのか、何が風を生んだのか。

神秘的な光がさしている。それはごく最近アジアを照らし、アレクサンダー大帝の勝利の場を照らした光であり、それが今や大西洋の大波を乗り越えるのにもう3時間を費やした後、アメリカで輝くためにやってきたのだ。いかなる星からその光がこの惑星に到着したのだろうか。

けれども真昼時なのに満月が空に輝いているのが見える。もしどこかの谷間で、月光だけが反射されているとしたらどうだろう。もし、月光の中だけを歩く精霊たちがいたとしたらどうだろう — 月光を日光と分離させて、月光だけの輝きを受ける者たちがいたならば。

私は王朝から王朝へとたどり、世界のある時代から別な時代へと進み、ローマ神話のジュピター大神からたまたまそれ以前のサターン神〔ギリシャの黄金時代の農耕神〕へと遡って

いった。両者の間にはどんなレテ川 [冥土にあるという忘却の川] が流れていたのだろうか。私は西へ沈んでゆくあの光にわかれをつけ、東から昇ってくる新たな光に挨拶すべく向き直った。

最初私は、昼間の薄い残光のような白い光が多すぎるのではないかと思い、それが昼間つけるろうそくのように、黄色い夢みるような光ではなく、光の白いクリームみたいではないかと気になった。けれども私が町から離れ、夜の中へより深く入ってゆくと、その光はふさわしいものになった。

粘土質の土手の凹凸によって生じた影を見ていると、そのような表面についての完全な認識を得るためには、日光のみならず月光も必要だとわかった。この土手は、光の強い昼間見ると、もっとずっと平たく見えるのだが、今やその突き出た部分が月光に照らされ、その部分が投げる影によってくっきりと浮き彫りにされており、その場面全体が昼間よりも変化に富み、もっと生き生きしてくるのだった。

## 6. 夕風とヨタカ

東側の土手に登ったとき、私のほおに他よりも暖かい空気の流れ、もしくは空気の層がふれるのを感じた。炉から来た一陣の風のように。勢いのいいその空気の流れはどれくらいの間太陽の熱をとどめるのだろうか。この流れが丘の斜面のはるか高くに押しやられるのがわかる。特に何も植わっていない野原や新芽の出たばかりの土地では、こんな風が一番軽いものだから。この熱をおびた空気は、ひよっとしたら、森に囲まれた高い位置の空き地では夜露に冷やされることもなく、朝の時刻になっても昨日の太陽の温みを記憶しているのではなかろうか。

突風が吹いてきた。正午のむし暑い平原から昇ってきて、丘の上に場を占めた風だ。この風は、昼間のこと、日のよくあたる真昼の時間と土手のこと、ひたいをぬぐっている労働者と花々の中でぶんぶんうなっているハチのことを語ってくれた。この空気の中で労働がなされたのであり、働き手たちはこれを吸ったのだ。

私に聞こえるヨタカの鳴き声は、森と町がどんなに遠く離れているかを教えてくれる。街中で暮らしている人らにはほとんど聞かれない声だ。もっともヨタカはときおりそんな人らの庭にも入ってくるのだが。それにヨタカは不吉な鳥とも考えられている。中年の人らの大半はヨタカの声なんか聞いたこともないだろう。村はずれに住んでいる人らとゆきくれた旅人だけがときたま耳にするのだ。しかし、この季節の暖かい夜に森に入ってゆくと、ヨタカの声はありふれた音だ。今や一度に数羽の声が聞こえる。だからここではヨタカは不吉ではありえない。夜と月光が不吉ではないように。ヨタカは森の鳥だけでなく、森の夜の側の鳥なのだ。ヨタカからすれば、「人間という新参者が我々の吸う空気を奪いとり、我々が静かにしている折りに、自然の間隙を騒音で満たしてしまったのだ。」人の夢の中でヨタカの声の聞こえるような場所は野生味のある寝場所ではなかろうか。

## 7. 夜のライ麦畑

今や私は穀物畑のかどをまわり、ヤニマツの林をぬけて、降りてゆく。深い木立に囲まれた下の畑へと向かい、涼しさのまさる、湿って霧のたちこめた大気の中に入ってゆく。草の葉に露しげく、大気は、その露で蒸留され、濃縮された草木の芳香を含んでいる。それはあたかも冷たい香りのよい蒸気風呂ないし蒸気の池の中へ次第に下ってゆくようなものだった。最初は半身まで、次には頭の上までも。それは太陽のことを忘れてしまった大気であり、太古の湿気の原理が支配しているところだった。露を含んだ霧の中には何か原始的で創造力を持つものがある。それがどういふわけか私に必ず音楽と限りない自然の豊穡さを想起させる。私は事物の起源により近くいるような気がする。

豊かなライ麦畑がその土地でなびいている。今やこれまでよりもさらに限りなく、はてしなく。麦の穂は夕べのそよ風にうなづいている。みたところ交替し合いながら。すなわち一度に皆がうなづくのではなく、別々に。だからこそこのなごやかな交替劇が見えるのだ。この穀物の果実が、今や杵つきの鎌で刈られるにふさわしく黄色に実っている——この長い麦畑を歩く人は、これを敬いつつめぐり歩いてほしいものだが——こうして麦たちが軍隊のごとくこの地を占めている姿はなんと豊かなことであろう。小さな木々や灌木がその真ん中にかすかに見えるが、それもライ麦たちの洪水によって圧倒されている。その木々は、麦の黄色い茎と入りまじって、おぼろな茂みとかすかな緑の葉の姿にすぎない。

この黄色くなびき、さらさらと鳴っているライ麦畑は、左右いずれの側も長くのびて、はるかに高く丘陵地へ達し、さらにそこを乗り越え、深い谷間の底にただ一つぽつんと狭く黒い通路を残している。それは突き破ることのできない軍隊の密集方陣だ。私はこの古代マケドニアの軍勢のそばを4分の1マイルにわたって歩く、むなしく出口を求めながら。この槍の穂の一斉攻撃を自らの胸に受けとめて、私のために逃げ道を作ってくれるアーノルド・ヴィンケルリード〔スイスの英雄、1386年、オーストリア軍と勇敢に戦い、戦死〕のような人はいない。

これは人間にとっての食物である。大地はむだなく働いてくれ、今やその収穫の重荷を負っている。それがなんと繁茂していることか。なんと成熟を急ぐことか。豊作の女神ケレスのような神がいますことを私は実感する。作物の中には、私に恵みの深さ、育む自然(アルマ・ナツラ)という発想を授けてくれるものがある。それがこの穀物なのだ。

ジャガイモはこれほどまでに大地のふところを満たしはしない。このライ麦は他の全てを排除し、土そのものを所有する。それはいわば自然が身につける前かけだ。その土地の農夫が言う、「来年はライ麦の収穫をするぞ。」それで彼は雑木林を開墾し、そこを鋤で耕すか、あるいはもしそこにひどく凹凸があり、石ごろの土地だったらただ野焼きをし、まぐわでならすだけにする。そして心をこめて種をまく。冬の間中、大地は農夫の秘密を守ってくれる。もっとも秋にはそれがいくぶん漏れはしたのだが。それから早春になると、山腹に生じる浅緑の芽が秘密を暴露してしまう。この実り豊かな作物が、岩や藪、地面の凹

凸にもかかわらず、遠く幅広くひろがっているのを見ると、その実りが農夫自身にとってもきっと思いがけなく、その運を感謝すべき僥倖と見なしているにちがいないと思えてくる。このなびく作物が農夫の鎌をさし招いているのを目にするまでは、この実りが自分の仕事の成果であることを農夫自身がまるで忘れてしまっていたかのようだ。これこそは、神々がつかの間の信心に対して授け賜うたほうびなのだ。

私が前と同じ高さのところへ登ってゆくと、再びあの暖かい空気の層に包まれる。こんな涼しい夕べの中にあるこうした暖かい層はたしかにこちよいいものだ。その空気はやや活気を欠くものではあるが。こうしてその空気は、ここかしこ、森の際から山腹へあてどなくめぐってゆく。日が沈んだので自分の主人のゆくえを見失ってしまった犬のように。

村のあたりでオオカミのほえ声ではなく犬の鳴き声とする。犬は飼い馴らされたオオカミだ。村人が馴らされた野蛮人であるごとく。彼らは夜人間ほども静かではない。彼らは敵の侵入を予測して敏感になっている。おそらく暗やみが作用し、彼らを猛々しくさせているのだろう。

ある状況のもとではこれはたいそう興味深く、音楽的ですからある音だ。博物学者のリチャードソン<sup>6)</sup>が、北米犬について、すなわち、カナダとハドソン湾〔カナダ東部の大きな湾〕地域の原住民たちによってもっぱら飼い馴らされたあの種の犬について述べている。「キャンプ地の犬たちは皆夜集まっていっせいに吠える。特に月が明るく輝くときに。」

## 8. 星々の輝き

不愉快な気分を体験し、それにどのような展開があったにせよ、その日の夕方、長年幽閉されていたかのような家を出てくると、小熊座を構成している数個の星が見える。あのたがいに関係しあった位置に — 永遠なる天の図形だ。暗やみが濃くなるにつれて青空に現れるあの輝く点々 — 盛夏に丘の上で見つかる野イチゴのようだ — あの点々が我々のものと異なる世界だと説明されても、とうてい信じられない。鳥たちの群なす大空という海、その上の上層大気の領域でさえも、雲の島々がちりばめられている。さらにはるか上空の天の海にヘスペリディーズの島々〔ギリシャ神話における金のリングの実る楽園〕がある。昼間は見えないが、暗やみが訪れるとその島々の火がこちらの岸辺から見える。コロンプスがサン・サルバドール〔バハマ群島東部の一島〕の火を目にしたように。

別の日の夕方、暗くなってすぐ窓辺で外を見ていると、貨物列車の灯が見えた。そして遠く離れているが同じ高さのところに、ちょうど列車の真上に明るい星があった。列車の灯とそっくりで、同じ列車の異なった部分に所属しているかのようだった。一方がかぼそい油のランプで、もう一方がおそらく一つの世界であるとは信じがたいことだった。

風がひどく吹くが月の明るいある晩のこと、星は数少なく、光もかすかであった。その折りに、私が船旅を共にした相手の人は、かなり零落していたのだが、それでも星々があ

ればなんとか暮らしてゆける、星々はいわば欠けることのけっしてないパンやチーズのごときものだ、と考えていた。

暮らしがままならぬことは私自身の無能さによるのかもしれない。けれども、冬の夜空には一種の貧困があるとも思われる。夏に比べれば、星のちりばめられている数も少なく、星の住み心地もよくないように見える。夏の夜空の深みにある数限りない点々よりも、むしろ冬の夜空のあの輝かしいきらめきによって、数少ない明るい星々が近づけられて目立つのだ。これが冬の夜空の及ぼす印象だ。おそらく、より高い緯度の星々はより明るくきらめいており、だからこそより近く数多く見えるのだ。一方、夏に不明瞭で、限りなく遠く見え、夜空に底知れない深い印象を与えるあの星々は、冬には全くといっていいほど見あたらない。天の正面の大広間があまり華やかに照明されているので、それがもっと離れた箇所をすっかり包み隠してしまうのだ。その空はずいぶん下に降りてしまった。

とはいえ、冬の天空が変化なく、見たところ貧弱であり、いくつか星座の作り出すあの不規則な数少ない図形が古代カルディア〔バビロニア地方、古代に占星術にたけていたセム族の人々が支配していた〕の羊飼いたちの眺めたものと同じだと思うと、私はいくぶん気がふさがり、悲哀をおぼえる。地上におけると同様に天にも新世界があればなあと思う。肉眼では見えない星々や星系の荒野が存在すると聞けばいくぶん慰めとはなるが、空は、森林でさえ与えてくれるあの多様さと野生味の印象を私が思うようには施してくれない。むしろ空は、永遠の法則がそうであるごとく、単純さと不変の印象を与えるのであり、この星座は古代の羊飼いたちが見たのと同じで、やはり同じ法則に忠実なのだ。そこには人の手が加わっていない荒野のような趣きはない。私は可視光線を通して夜空を千回も観察したような気がする。それは詩歌よりも科学の領域だ。でも私が知りたいのは科学では知り得ないような星々だ。孤独な旅人の知っている星々だ。

否、古代カルディアの羊飼いは、今私が見ているのと同じ星々を見ていたわけではないのだ。それにも私がおぼろげに天空の方に持ち上げられたなら、あの羊飼いたちがしていた星々の分類を受け入れることもないだろう。彼ら古代人たちが押しつけたあの星々の名によって私自身が幻惑される必要はないのだ。私の知っている太陽はアポロ神ではないし、宵の明星がヴィーナス女神でもないわけだ。天空は少なくとも大地が新しいのと同じほどに新しくなければならない。

星々のあの分類法は古くさい。まるで天空にカビが生えてしまったみたいだ。それも星々があんなにひとまとめに密集させられたので、熱を発し、空にカビを生じてしまったのだ。もし星々が固定しているように見えるなら、これまでに人々がそのように見ることをよぎなくされてきたからだ。聖書に関してのように、天空に私は旧約のみならず新約の解釈を読みとる。私はあの羊飼いたちと同じほど星々に近く立っているのではなからうか。天空は通常我々の天文学と同様に無味乾燥で貧弱にみえる。それは星々の軍勢にすぎない。天文学が星々の分類目録でしかないように。天の川（ミルク・ウェイ）はミルクを出しもしない。天文台は倍増されても、天空はほとんど注目されはしない。我らの科学は、いく

つか格好な話の種となってくれる。星々への距離や星々の大きさについての堂々たる解説によって。でも、その星々が人間にとってどのように関わるかについてはほとんど全く教えてくれない。人がいかにして国土を測量し、船を操縦すべきかは教えてくれるが、いかに人生の梶をとったらよいかは告げてくれない。

天文学者は、意義のある現象について、あるいは現象というものの無意義さについて盲目だ。ちょうど鋸をひくとき木くずから目を守るため塵よけ眼鏡をかけている木びき師のように。問題は何を見つめるかではなく、何を読みとるかなのだ。

むしろ占星術の方がこれよりも高い真実の萌芽を含んでいた。ひょっとしたら星々は、天文学者よりも牛馬を引いてゆく連畜のチームの御者にとっての方がより意義深く、真の意味で天上的なのかも知れない。今や星々を見る人はいない。皆がそれぞれ自分の地区の学校で天文学を勉強し、太陽まで九千五百万マイルの距離があるなどと学ぶ。私はそんな学説を聞いてもあまり実感が湧かなかった。というのも私はそんな距離を一度も歩いたことがないからだ。こんな話はどうも信用できそうにない。もしもこんな学説のいずれかでも正しいと証明されたなら、私のみならず皆さん全てが驚愕することだろう。にもかかわらず太陽は輝く<sup>7)</sup>。

肉眼は望遠鏡をあてた目よりも容易にもっと遠くを見ることができるとも知れない。それは、その目を通して見るのが誰かによるのだ。肉眼よりすぐれた望遠鏡は発明されたことがない。あんな大型の望遠鏡では、作用の力は大きくても反作用の方もやはり同様に大きいのだ。詩人の目はすばらしい熱狂状態でぐるぐると回り、大地から天空までを包みこんでゆく。けれども天文学者の目はめったにそんなことはしない。その目は天文台のドームより遠くを見ることはしないのだ。

天空の肉眼で見える現象に比べれば、科学の言説は私にとってとるに足りないしろものだ。人間の目こそ真の星探求者、彗星の探索者なのだ。

## 9. 家路

町からは遠いが、その道に入ってゆくと、私の足許に砂が感じられ、私の足音が聞こえる。すると、もう我が宅地内の砂利道に着いたかのような気分になる。もはや私にはヨタカの声も聞こえないし、自分の影に注目することもしない。というのも私はここである旅人に出会うのを期待するからだ。私は自分がただ歩いているだけだということに気づく。家路をたどる間中、記録にとどめたいような想いをいだくこともない。この間の私の歩みはかなり味気ないものだ。私の歩みと想いは、共にたどる道に導かれて町へと向かう。その道のみが目に入り、私の想いは、五感に示される事物から外にとさまよい出る。私はもうそこにはいないも同然だ。人々の歩くとおりに歩いてゆけば、その様は世間のありようと変わりはない。でも、もしその境界を乗り越えたならば、私は妖精の国にゆけたはずだ。その例外をあげるとすれば、ただ一度だけある場所で、突然、月がお供の星々を引きつれ

て、道ばたの水たまりにまん丸に映っており、しばしの間、大地が私の足許で融けてしまうのを目にしたのだった。

冬の夜、線路の土手道を歩いていると、凍った地面の上で自分のたてる足音に心が乱される。夜の沈黙の音を聴きたいと思う — それが聴くべきプラスの価値を持つものだから。私は耳をふさいで歩くわけにもいかない。むしろ静止して耳を開き、村の騒音から遠く離れ、その夜が私の心に印象づけてくれそうな音、豊かで雄弁な沈黙の音を聴かずばなるまい。その数かぎりない声のささやきをぜひ聴かなくては。沈黙のみが真に聴くべき価値のある音なのだ。それは大地の土と同様にさまざまな深さと豊かさを持つ音だ。今やそれは人々が飢えと乾きで滅んでゆくサハラ砂漠にすぎず、次ぎにはそれが西部の肥沃な低地、すなわち大草原地帯のことになってしまう。私が村を離れ、森に近づいてゆくときに、ときおり月に向かって吠える猟犬たちの声なき声を聴こうと耳を澄ます。彼らが何かえもの臭い跡を追っているかどうかを知るために。もし夜に月の女神ダイアナがいなければ、何の価値があるだろうか。

沈黙がうたう。それは音楽的で私をどきどきさせる。私は沈黙の声が聞こえた夜々を思い出す。もの言わぬ者たちの声が聞こえたのだ。

もし夜が単に昼間の反対にすぎないのならば、夜私には自分の足音以外は聞こえないはずだ。死は私とともにあり、生命は遠のいてしまうことになる。もし自然の根源が人間的でなく、もし風が、星々のまたたくごとくうたったり、ため息をついたりしないならば、私の人生は浅く流れてしまうだろう。

私は自分という存在の深さを測る。私はおびたしい私の同盟者たちと共に歩む。私自身が同盟組織であり、ヨーロッパの主権者たちを吸収する神聖同盟<sup>8)</sup>なのだ。

こうして私は帰宅する。

普通の月光よりもっとすばらしい月光があるとすれば、ゆき暮れた旅人だけがそれを眺めることになる。

私が街はずれにいて、月の静かな荘厳さを楽しみ見ているおりに、よく思うのは、万人がこの奇跡に気づいており、彼らもまたどこか他の場所での同じ美しさをひそかにあがめているはずということだ。けれども家に入ってゆくと私はその幻想からさめる。人々ははさみ将棋や衣服のこと、あるいは小説に夢中なのだ。この人らも、よろい戸越しに月光の輝きについてしばし報知を受けとったはずなのだが。

## 10. ほの暗い描写

1853年、5月9日、川辺で日没時に。この夕べ、川の水がなめらかで、空気があたたか

くなりはじめるときにボートを漕ぐのは楽しい。今日がはじめてのあたたかい日であったといえそうだ。ブラックバード [ムクドリモドキ科の鳥] はひっこみ思案のはずだが、その豊かなさえずりが音高く、絶え間がない。数知れぬ他の鳥たちの鳴き声はいうまでもない。川の対岸の沼地からステイクドライバー [ツツドリ的一种] のポンプのような規則正しい鳴き声がある (その最初のは先月7日に聞こえた)。今、星明かりのもとでシギのキーキーという声が牧草地の上です。だが、空を舞う音はしない。この季節で最初のコウモリが、ほの暗い大気の中で不意に頭上をジグザグに飛ぶ。そしてすぐにまた視界を去ってゆく。

この動物について (ある作家が) いわく、「昼間は奥津城のような洞窟の丸天井からぶら下がり、経かたびらをまとった死者のあの絶対の沈黙をまねている。」夜になるとコウモリは「暗黒の地区を通り、黙して飛行する大がまを持ったガイコツ」となる。

眠気をさそういびきのようなガーガーという声が牧草地の端から上がってくる。最近冬眠からさめたある種のカエルの声だ。水に浮かんでいる板を私はひろい上げる。それはジャコウネズミがすわっていた板で、その独特のにおいが発散し、私の両手にもそれが伝わってしまう。もうすでにパウト [ナマズ的一种] を釣っている人らがいる。

53年5月17日。夜大型の昆虫が飛びはじめる。夕べにカエルたちのもの悲しい鳴き声をはじめられ、それは天気があたたかいことをつげている。

53年5月17日に最初のヨタカが目にとまった。

北極地方の航海者に対し苦情を述べたいのは、彼らが我々に、直接間接を問わず、その光景の独特のわびしさや北極の夜のはてしなく続く薄暮のことをあまり十分には実感させてくれないことだ。それと同じ次第で、月光をテーマとする者は、月光のことだけでそれを手にとるように説明するのは困難であるはずだ。もっとも、そうせざるをえないことはわかるのだが。

もし私の書き物の各ページがもっと大きな文字で書かれているのなら、私は手もとのランプを消して窓辺に立ち、月明かりだけでそれを読むことだろう。

気になるのは、私が夜の月下の散歩の場面にあまりほの暗さを入れていないことだ。各行がたそがれか夜のことを含むべきなのだ。少なくとも夜の明かりは、月の黄色かクリーム色の明かりであるべきで、せいぜいが銀色の輝きか星々のかすかな光線を伴ったものであり、昼間の白光やざらざらした光ではいけない。ときおりは単なる燐光、もしくは朽ちた樹木の発するような輝きを持つことがある。もしもたまには私の文章が、見た目には安全だが実は危険な沼沢地にいたり、そのはるか上空を、鬼火 (イグニス・ファツヌス)のごとくおぼろにさまようとしても苦情は言うべきでない。その文章が持つ独特なほの暗い静寂さによって、読者にその時刻が夕べか夜であることを忘れさせないようにすべきな

のだ。もっとも私は、あえてその暗さのことに読者の注意を向けさせはしないのだが。もし気ままにさせておけば、読者はもちろんのこと、昼間の雰囲気をも想定してしまうだろう。

月は黄色い光を集めつつ、雲の上で勝ちほこっている。が、いぜんとして西の方はあちこちとかすかな赤い色合いで染められており、昼間のたどった軌跡を残している。経験のない者はこれを夜と呼ぶかもしれないが、実はまだまだだ。月が東の方で雲間にいるときに、動きの鈍い重々しい雲の群が西の地平線に横たわっていて、いろんな動物や人間たちの姿を展示してみせる。どうして我々はこんな姿形をかくも容易につきとめられるのか。鯨や巨人たち、あるいは横たわった英雄たちの半身像——ミケランジェロの作品のようではないか。人類の彫像の展示室ができています。イタリア人の頭にのせた一枚の板かと思うと、ちがう、地平線に沿ったあの黒い彫像たち。神話の巨人（タイタン）が頭で運ぶ板。こんな柔らかい、軽い材料なのになんというしっかりした重々しい輪郭であることか。

(続く)

#### 註

この翻訳は原作の約半分（前半部）を対象にしたものである。テキストは AMS のリプリント版（1985）を用いた。原本（ソローの自筆原稿）はウイスコンシン大学のメモリアル・ライブラリーの所蔵という。

翻訳に際しては、原作にはないことだが、作品の章分けを行い、各章の内容を要約するような章名をつけた。これは作品の各部分を参照する場合の便宜を計ったのである。こうして区分された各章は、内容的に一応のまとまりと一貫性を持っていると思われる。本文中の註に関しては、原作者のつけたもの、あるいは原作者の意図に直結したものの場合は丸カッコに、翻訳者自身の判断による場合は角カッコを用いた。比較的長めのものは後註とした。

- 1) ボストンから北西へ向かいフィッチバーグに至る鉄道。途中にソローの郷土コンコードの駅がある。
- 2) イスラエルの地名で、「配偶あるもの」を意味し、イスラエルの輝かしい未来を象徴する。また、人生の晩年における安息の地を指す。
- 3) 仲秋の満月に続く次ぎの満月のおりに狩猟期に入る。このためにこの表現がされる。
- 4) ギヨーム・ド・サルスト・デュ・バルタス（1544-1590）、フランスの詩人。作品『ラスメーヌ』（「創造の叙事詩」）1578年。
- 5) ジョシュア・シルヴェスター（1563-1618）、イギリスの詩人。デュ・バルタスの『ラスメーヌ』を1592年に翻訳した。
- 6) サー・ジョン・リチャードソン（1787-1856）、スコットランドの博物学者で北極圏地域の探検家。*Fauna Boreali-Americana*（『北アメリカの動物相』、1829-37）等の著者。
- 7) ガリレオが言ったという有名な言葉、「それでも地球は動く」のもじりらしい。
- 8) ナポレオン I 世の失脚後、1815年にロシア、オーストリア、プロシア等の間に結ばれ

た同盟。理念としてキリスト教的な友愛を目的としたが、実質的には革命の防止という意図があったといわれる。